

## モニタリング項目 No.20 2020 年度調査結果について

## 1. 対象団体

エコツーリズム検討会議の構成員や提案事業に取り組む 16 の団体・個人を対象に、2020 年 12 月にエコツーリズムの推進について聞き取り調査を行い、14 の団体・個人から回答を得た。

No.	団体名	No.	団体名
1	環境省	9	知床小型観光船観光船協議会
2	林野庁	10	知床羅臼観光船協議会
3	斜里町役場	11	知床ウトロ海域環境保全協議会
4	羅臼町役場	12	斜里山岳会
5*	知床斜里町観光協会 知床五湖冬期利用促進事業検討部会	13	羅臼山岳会
6*	知床羅臼町観光協会赤岩地区昆布ツアー部会	14	石川委員
7	知床ガイド協議会	15	愛甲委員
8	知床羅臼ガイド協議会	16	知床財団

\*調査対象が重複したため、1 団体として聞き取りを行った。

## 2. 結果

## ①「知床エコツーリズム戦略」の基本方針について

【基本原則】	該当
遺産地域の自然環境の保全とその価値の向上に貢献している。	13 団体
世界の観光客への知床らしい良質な自然体験を提供している。	11 団体
持続可能な地域社会と経済の構築に役立っている。	11 団体

【エコツーリズムを含む観光利用の推進にあたって必要な視点】	該当
事業、ツアーが、地域主体・自律的・持続可能である。	6 団体
事業、ツアーでは、共有・協働・連携などのネットワークが構築されている。	10 団体
自然環境の保全に配慮している。	11 団体
利用者の自然生態系に関する理解が促進されている。	12 団体
事業及びツアーが、地域の文化・歴史的背景を踏まえて実施されている。	10 団体
利用者へ自己責任の原則が認知され、管理責任の分担が行われている。	6 団体
事業、ツアーは知床のブランド価値を高めるという視点がある。	9 団体
事業、ツアーは順応的管理型で実施されている。	8 団体

【「該当」と回答しなかった者の意見】

- ツアー等の実施主体ではないため回答できない。
- 内容が観光事業者対象なので回答しづらい。

「知床エコツーリズム戦略」に則り、特に力を入れて取り組んでいることや、新たに始めた取組があるか

- 羅臼岳など知床連山の登山道整備事業（環境省発注）の中で近自然工法をさらに取り入れてもらえるよう働きかけ、一部を実施した。来年度（令和3年度）から作業内容や範囲を拡充できるよう調整中。
- 独自に土壌流出などで利用に支障が出てきているニッ池テントサイトの調査を行ったので、今後提案に活用していく予定。
- 知床の開拓等の歴史を取り入れたツアーを始めた。
- 羅臼の「間欠泉」をツアーに取り入れた。
- これまであまり研究活動においては意識してこなかったが、聞き取り対象になった途端に、研究や教育活動も学生や観光客という相手に与える影響も考えて取り組みが必要だと再認識しました。
- 新しい船に環境に配慮したエンジンを使用している。スクリューなどもクジラやシャチに配慮し、音や振動の少ないものを使用している。
- シャトルバス車内でネイチャーガイドによる自然解説や国立公園の利用ルール等の解説を実施した。
- ネイチャーガイド付きのバスの運行をとおして、知床を訪れた観光客に自然や地域の魅力を伝え、これまでの課題となっているヒグマとビジターとの軋轢緩和につなげる。
- 引き続き、知床岬地区での昆布の歴史を SNS を利用して発信している。また道の駅「知床・らうす」内では昆布漁師さんより協力を頂き、生の昆布を展示し、観光客の皆様にも昆布の歴史について知って頂いた。
- 旅行会社でも「エコツアー」や「アウトドア」を取り扱う会社との取引が増えた。
- 新たにパドルスポーツに対応するライセンス取得を目指している。
- 海上のゴミの回収を行った。
- 新たなシャトルバス運行をマイカー規制協議会の一員として取り組んだ。
- 環境省補正予算「国立・国定公園への誘客の推進事業及びワーケーションの推進事業」を活用して、【知床羅臼 NOASOBI・MANABI プロジェクト】や【熊越の滝遊歩道の環境整備とイベント】を実施して、誘客を図った。
- コロナウイルス感染症対策の強化。ガイド事業の持続化事業に力を入れた。地域の観光事業者やガイド事業者と協力した遊歩道の整備事業などをコロナ対策の補助金事業において実施した。

## ②エコツーリズムに関わる利用者・参加者の数や意識、行動の状況について

利用者・参加者の数	
増加している	0 団体
減少している	6 団体
どちらともいえない・未回答	8 団体（ツアー等は行っていない、特異年で回答できない）

利用者・参加者の意識	
変化している	3 団体
変化していない	2 団体
わからない・未回答	9 団体

利用者・参加者の数や意識、行動について、気付いた点や気になる点はあるか	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 利用者の行動については令和元年末から2年6月にかけてはCOVID-19により移動を控えたことによる減少が著しい。6月下旬以降は登山ガイドについては前年同程度の利用となったがCOVID-19対策を徹底することについて理解を得ながらの実施となった。COVID-19は北海道でのクラスター発生が早い時期にあったことからリピーターの顧客でも警戒感が強かったが、状況を説明する必要があった。</li> <li>● 当社では利用希望者からの受注型のみ行うことで家族単位や個人の利用者が中心とし、あらかじめツアーを用意する募集型は感染対策として実施しなかった。日本アルプスなどの山小屋がCOVID-19により休業するなど管理上テント泊ができず日帰り登山も難しくなったことで、知床を計画したという顧客もいた。</li> <li>● コロナの影響で、今までの事が参考にならない。ただ、一人旅のお客が多いように感じた。密を避けてのコロナの影響かもしれない。</li> <li>● 調査において気づいた利用者の行動については、コロナの影響から歩道上などで距離をとる方がいること。登山道では、路傍の踏みつけにつながる可能性がある。また、団体バスの減少によるマイカー・レンタカーの増加。</li> <li>● 岩尾別地区でのヒグマ撮影を目的とした交通渋滞は変わらず発生している。ヒグマ撮影を目的としたカメラマンが例年停めていた駐車帯を閉鎖したことにより、行政機関へのクレームも行われた。</li> <li>● ツアーは催行できませんでしたが、道の駅での昆布の展示、漁師さんや協会職員から昆布の解説をすることにより、知床先端部や羅臼昆布に興味をもって頂ける方が多くいました。</li> <li>● 団体ツアーが減ったため、利用者・参加者は減少した。</li> <li>● 少人数でのプライベートガイドは増加した。</li> <li>● ガイド会社増による顧客側の選択肢が増えている。</li> <li>● アウトドアやキャンプブームの中でギアの間違った使用方法をしている利用者を見る。</li> <li>● 羅臼岳の入林簿の集計状況から、今年度については団体・ツアー利用が例年に比べて少なく、単独利用者が多い。</li> </ul>	

- ゴミの投棄が非常に多かった印象。
- 利用者がこのツアーに参加する前（旅前）に自分で情報を仕入れ、自然保護について理解をして参加している人が増えているようにおもう。
- コロナの閉鎖状況に起因して、原始的な自然体験や、非日常体験を求めて知床に来訪する利用者が多かった印象。
- コロナウイルス感染症の影響からか、観光客入込数は減少している。一方で、キャンプサイトを利用する観光客が例年以上となっている。ただし、キャンプ場は管理されているため、トラブルは発生しなかった。個人客が短期的に集中しており、その影響もあってか道路上のゴミが例年以上に投棄があったと感じられる。
- 利用者は大幅に減少し、従来とは異なる入込み傾向となった。緊急事態宣言やGoToキャンペーンなどの政策に大きく翻弄された。入込みのパターンや利用者意識は今後大きく変化する可能性がある。
- 外国人が激減し、道内利用者が増えた結果、連休に利用が集中する傾向が復活した。
- 利用調整や利用制限は利用者から受け入れられる素地ができつつあり、利用ニーズに応じた受け入れ態勢の整備、検討が重要。

### ③ツアーで使用しているフィールドや地域の自然環境について

気になることや心配なことがある	11 団体
気になることや心配なことはない・未回答	3 団体

- 羅臼岳岩尾別コースは洗掘によりガリー化した箇所を補修されてきたが 10 月の降雨でそれらの箇所が破損した。昨年春の三ツ峰斜面や大沢の土砂流下など、従来より雨の降る季節的なタイミングや短期間でも集中的に降るなど気象の変化に伴う登山道の荒廃が進んでいる。今年は降雨が少なく感じたためもあるが、登山道が乾いた感じになってしまったのは道や道脇の植生も失われて路面が硬い層まで達したことを意味している。
- 登山道の崩落は羅臼岳ニノ肩雪田、三ツ峰斜面、南岳山頂部、硫黄山第二前衛峰中ノ廊下側、硫黄山山頂部連絡路などで本年さらに進行した。知床別平のガリー化も規模は小さいが進行中であり、流下した土砂が平中心部のお花畑を被覆するようになってきた。
- 早い融雪と降雨が少なかったことで知床連山縦走路の水場が枯れるなどで水の確保が困難になった。ニッ池地ノ池が夏山シーズン中に完全に干上がる状況はこれまでなかったと思う。
- 第一火口を除く知床連山縦走路のテントサイト全ての地盤が流下して傾斜が生じてきているが、その中でもニッ池は本年さらに状況が悪化し、サイト西側のスペースはさらに傾斜が増した。ニッ池テントサイトは降雨時の泥濘かも問題であったが、サイト東側に窪みができて水が溜まるようになってしまった。
- 知床に長期滞在する旅行会社ツアー及び個人お客さんが、増えてきている。それに対応するためのフィールドが少ない。全体的に五湖に集中しすぎている。
- 自然を守るという名目での規制がありすぎる。

- 放置された昆布番屋は倒壊が進みあと数年で殆どが自然消滅する模様、但し民有地はそのまま存在している。この民有地を 100 m<sup>2</sup>運動のように買い取りするシステムが出来ないものか。
- 定置漁業の陸上利用も減少しており、今が最も原始の状態に近づきつつあるように見える、この機会を逃してはならない。
- そもそも先端部の陸上におけるアクティビティはシーカヤックや登山と同様トレッキングもアドベンチャーの領域に近く「観光や旅行及び地域の経済振興」というエコツアーの本旨とはちょっと違うところにあるのでは？
- 「利用のあり方」についていろいろ議論のあるところだが、少なくとも動力船による上陸観光は「s59 申し合わせ」の趣旨を尊重すべき。
- 知床ルールはマナーとして有用であるが自然のルールは厳しい、逆らえば命に関わると心得るべき。
- 現状の利用形態を続ける限り環境保全に関しては全く影響なし。
- 羅臼岳の登山道には、近自然工法で特に土嚢を使用して補修した箇所が多く、だいぶ歩きやすくなってはいます。補修から年数のたった場所では、土嚢の損傷が目立つ場所もあり、土嚢袋の支持力で斜面の土壌をおさえているような場所では、新たな崩壊を招きそうな場所もあり、補修の更新が必要だと思えます。  
また、カムイワッカ湯の滝の駐車場からの登り口で、今年だけではないですが、難儀される方が多いのが残念に思います。あれが、一種のハードルになっているとの考え方もありますが、せめて生ぬるいお湯を訪れた人には触ってほしいなと思っています。段差の解消は難しいでしょうから、ゆるやかに上っていき、周囲の植物をつかんだり、ストックを強く突き刺すような行為をしなくてもよいような歩行路の確保が望ましいです。
- 羅臼の浜の様子。獲れる魚も変わってきている。
- ゴミの不法投棄が多発。ゴミにヒグマが餌付く可能性があり、ビニール袋をくわえたヒグマも目撃された。
- カムイワッカ地区の活用に向けた公園法上の新たな位置づけにもかかわらず、長期にわたる「道道閉鎖」による硫黄山や縦走路への入込み減少(集中)による登山道の荒廃が懸念されます。例えば「入込み減少・集中→荒廃加速→整備あるいは放棄」ではなく、「適度な分散利用」によってコストをかけないで登山道が「自然維持」されていくことが必要(理想)と判断します。また、上記の登山道利用に加えて、カムイワッカ地区は新噴火口の火山活動や硫黄採掘史跡としての適切な利用を検討すべき重要なエリアです。これらを踏まえて、「適度な分散利用」を促すために道道の「特例利用」期間を現状より延長して湯の滝までの道道利用期間に合わせるべきだと思います。また、「適度な分散利用」を把握するためのモニタリングは必須です。
- カムイワッカ特例使用期間の延長と周知について⇒インターネット上でしばしば使用期間外の登山を見ることがあるが、そもそも現地でのチェックがないような状況では使用期間の延長をしても問題ないと思っている。
- 二つ池キャンプ指定地のロープについて⇒もっとわかりやすいローピングについて知恵

を出しあいたい。

- カムイワッカ湯の滝の駐車場から湯の滝（川のエリア）に入る登り口が危険と感じる。特に雨天時や濃霧の際には滑りやすく、転倒する利用者が多く見受けられた。
- 幌別～岩尾別エリアで、（山菜利用目的とみられる）ワラビなどの刈り取りが多く見受けられた。
- 今年も知床自然センターと鳥保の間で林の伐採が行われた。このように簡単に国立公園内の林を伐採してしまう斜里町と知床財団に不信感を感じます。行き過ぎた利用優先だと考える。
- 年々暖冬傾向のためツアー実施日数が減少傾向にある。
- ヒグマとの人身事故リスクは常に課題である。
- 赤岩地区におけるストーキングしたヒグマについて、来年度以降も同様な問題が発生する可能性が懸念される。
- 遊歩道等の整備工事は必要であるが、今後の維持管理体制については、不安がある。民間事業者等の参画を含めた検討が必要。
- 五湖への特定期間の集中傾向が顕著であり、渋滞等が深刻化している。

#### ④その他（外国人の動向、エコツーリズムに対する意見等）

- 知床が世界自然遺産となってから増加してきた外客登山者（従前ヨーロッパ・アメリカ合衆国方面からが主で、日本アルプス等で多い韓国・中国等アジア圏からの登山者は極端に少なかった）は COVID-19 により非常に少なくなった。
- COVID-19 によりいわゆる三密を避けるために市街地でのアクティビティが敬遠されたためか登山にシフトしてきた＝経験が少ない登山者が増加したように感じる。これは知床に限らず全国的な傾向である。
- COVID-19 により旅行代理店のツアー登山が減少したために個人やよく知った数名によるスタイルが主となった。ツアー商品のメインだった中高年、高齢の登山者は減少傾向とを感じる。
- もともと公共の移動手段がないところに来て COVID-19 により人間同士の接触を避ける行動様式が進んだ結果、少人数グループなどは一人ずつ車両で移動してきて登山口で集合する行動が見られた。そのため、従前と同じような入山者数にも関わらず登山口周辺の駐車台数が多い状況が見られた。また、三密を避けるためなのか運転が不慣れな登山者が増えたためか駐車方法が悪く台数が停められない、緊急車両を含む大型車両の通行に支障が生じる、などの様子が見られた。
- 登山環境のデジタル化（GPS 付きスマートフォンによる登山情報や地図アプリ）が進んだことで従来からの紙媒体や現地での掲示よりもインターネット媒体の情報に依存していると感じる。そのためネットやアプリにアップされた指定テントサイト以外場所での幕営情報や誤ったコースタイムや水場の情報などは受け入れるにも関わらず、最新の現地

の情報を直接提供してもそれを容易に認めないなど確証バイアスに陥っている登山者が多い傾向が見られる。COVID-19による青年、壮年層による個人や数名の少人数が主流となった状況で、これらの傾向はさらに強くなったと感じる。

- 登山装備の軽量化や行動時間の高速化により従前の山頂を目標とする行動以外に知床連山で言えば縦走路の途中までを日帰りで行復するなどの行動が見られるようになってきた。従前の紙媒体やオフィシャルなウェブ情報ではこのようなオプション登山は扱いが難しいため掲載されてこなかったが、登山アプリ系では一般ルートと同じようにアップされる。そのため、これらの情報をもとにした行動が増えてきていたが、特に今年はCOVID-19により夏期のカムイワッカ方面シャトルバス運行がなかったことで縦走についても強行的な往復の計画の登山者が多く見かけた。
- 総じてリーダーやガイドによらないネットや登山アプリに頼る傾向がある登山者は、自然環境への配慮は知識としてはあるものの具体的な行動がわかっていない者が多いように感じる。特に植生への配慮不足は致命的であり、コースタイムの短時間化と相まって、荒廃した正規の登山道を外れ縁の歩きやすい植生に踏み出しているのはよく見られる。
- ネット上の誤った情報などは環境省自然保護官などが管理者に連絡している場合もあるが、当然全て対応できるわけではないので、関係者間での情報共有や通報作業など協働が必要であろう。
- ドローンやアクションカメラによる撮影が日常的に見られるようになった。ドローンについては法令に基づく規制もあるが、土地所有者・管理者の承諾が必要という部分を登山では無視している者が見られる。アクションカメラはヘルメットやハーネスを体につけて撮影している者が多いが、ジンバルを手持ちしている者は撮影を優先してすれ違いで道を譲らないなどマナー違反が目立つ。
- もう、エコツー・エコツとと言う時代ではないと思います。
- 昨年より、インバウンドは減らして、国内のお客さんにシフトしておりますのでインバウンドによる影響はありません。
- お客さんも自然に対しての意識が変わってきているので、それに対応したツアーコース作成が必要に思います。(既存のコースでも、見せ方、見る角度によっては新コースになる可能性はあると思います)
- 先端部トレッカー死亡事故多発に関して、「見守り」の漁師の減少 かつて監視や救助活動に貢献していた昆布番屋が皆無となったことが大きな要因では？
- へつりや高巻き箇所は技術的に沢登りやクライミングと同等あるいはそれ以上で更に海況を読む判断力が加わる。しかも海蝕崖は波浪の作用により難易度は年々増している模様。
- 原則は自己責任であるが、海岸歩きという安易な気持ちから「技術や判断力の伴わない利用者」の入域が依然と続いているのでは？
- 地元の警察、海保、消防の努力により公的救助機関の救助体制は一応確立され、救助訓練も2回実施された。しかし事故予防対策は整っているとは言えない。
- 誰もが挑戦する権利はある。入域の自由は奪いたくない。喪失した「見守り体制」に代わ

る具体的な手立てが必要か？

- 提案が少なくなっているのが気になります。事業者や関係者のみなさまの取り組みが縮小している訳ではないと思います。
- コロナの影響で、ホエールウォッチングの時期の乗船者は例年の 5 割程度だった。冬のツアーも外国人の予約はほとんどない。国内のツアーからは少し予約が入っており、旅行会社も力を入れているように感じる。
- コロナ禍により、外国人観光客の姿がほとんど見られなかった。
- バス等の団体旅行客が減少し、マイカーを利用した個人利用客が多くなった印象。
- コロナウイルス感染が世界で多くなったが、インバウンドの旅行会社からは世界自然遺産知床についての情報を得ようと観光についての問い合わせは多い。団体ツアー（国内）においても、30 人を最大とするツアーが主流になるとの事を聞いているので、羅臼内のできる体験プログラムについては需要が増えてくることが期待される。
- 登山道管理者側への意見として、知床連山縦走路の植生保護や迷い込み防止のための「規制ロープや鉄杭」や「看板」について、もっと知床らしいセンス（景観配慮）ある統一的な形態や設置方法を工夫すべきと考えます。
- 知床五湖の登録引率者を継続しないガイドが出始めている。コロナウイルスにおける集客減ではなく、制度や運営に理解ができないためだと推測される。自分も理解できない点があるがヒグマ期に大ループを 15 回ほどは利用するため継続をしている。ただし現制度では積極的に利用しようとは思わない。知床五湖で稼ぎたい引率者とこだわりをもって集客している引率者とは制度に関する理解に乖離があるのか？
- 例年と比較して外国人利用者がほとんどいない状況であった。
- コロナウイルス感染症の影響も今後どのようになるか解らない状況で、インバウンドに期待する事業やツアーは止めた方が良くと思う。また今回の件で分かったようにインバウンド外国人観光客を当て込むのはリスクがあると思った。時折富裕層対象のツアーという企画を試みてはという話題を聞くが、それは本当に必要なのかと考える。それよりも多くの人が楽しめる環境教育にもなるようなツアーを進める方が国立公園としての役割を果たすと思う。
- 特にこの事業は外国人旅行者割合比率が 50%を超えており、あと数年は見込めないことから国内需要の取り込みが必要。
- 知床地域で持続的な観光利用を推進するためには、宿泊業、飲食業やガイド業等地域の関連団体（特に観光業）と一緒に取り組んでいく必要がある。そのためには、観光事業者を統括する事業体（観光協会）の体制強化が必要と感じる。
- コロナウイルス感染拡大を受け、外国人の団体旅行の中止、政府によって外国からの渡航規制が行われた影響で外国人旅行者の数は 0 人に等しくなった。国内旅行者については緊急事態宣言等で動きが鈍っていたものの、その後は国や北海道から観光施策の影響もあった為か閑散期になっても観光客の姿が見られていた。
- コロナ収束後を見据えた利用のあり方の検討が必要。公園利用の仕組みや事業の担い手が持続できなければ、需要回復後の取組に支障をきたす可能性がある。



- エコツーリズム戦略については、現行での実施体制で一定期間が経過しており、観光を取り巻く情勢も大きく変化しつつあることから、これらを踏まえた定期的な見直し時期と考えられる。